

奄美大島大和村における地域資源果樹の利用に関する学際的研究

香西直子（農学部）・兼城糸絵（法文学部）



なぜ大和村ではスモモ「花螺李」の栽培が受け入れられたのか？



● 大和村

プロジェクトの目的

本プロジェクトの目的は、奄美大島の大和村でスモモ栽培が受け入れられた理由を自然科学および人文科学的なアプローチにもとづいて明らかにすることである。奄美大島大和村では減反政策以降にスモモ栽培が導入され、いまや地域を代表する果樹となっている。しかし、なぜ温帯果樹であるスモモの生育が可能なのか、そしてスモモのようなある種の「外来種」がなぜ人々の生活に定着できたのかは不明である。本プロジェクトでは島嶼地域における近代以降の生業転換の一端を解明するとともに、地域資源果樹の現状と未来について文理融合的な視点から検討した。

大和村におけるスモモ栽培の始まり

「花螺李」は日本統治期の台湾からもたらされ、奄美大島で結実することが確認された後に栽培が始められた。大和村では減反政策をひとつのきっかけにして栽培が盛んになり、換金作物としての価値が高いことから現在も栽培が続けられている。



スモモ栽培のきっかけを作った大山久義氏の顕徳碑

人々の生活とスモモ栽培の関わり -スモモ栽培に対する認識-

- ✓ 「花螺李」は2月中旬に花を咲かせ（図1）、5月中旬ごろに収穫期を迎える。
- ✓ 基本的には年に数回肥料をやり、特定の時期になると病害虫駆除のための薬品散布を行う。そして、枝が大きくなると紐で引っ張って固定するといった作業が行われるが、それ以外は特に作業を必要としない。
- ✓ ある話者が「適当に肥料を与えておけばそのうち実をつけるようになる」と語るように、育てる手間がかからない作物だと認識されていることがわかる。



図1 開花期のスモモ「花螺李」

小規模農地でのスモモ栽培 -「アタリ」とスモモ-

- ✓ 大和村では住民（非スモモ農家）がアタリ（※）と呼ばれる場所でスモモを育てている様子がみられた。今回観察したアタリではスモモが5~6本植えられており、その隙間を埋めるようにさまざまな野菜が植えられていた。
- ✓ スモモと野菜の共存は、スモモ農家の畑でも観察された。大和村のスモモ畑では島野菜をはじめさまざまな野菜が植えられていた（図2）。これらの野菜は自家消費の場合もあれば、出荷用に育てている方もいるという。
- ✓ これらのことから、アタリのように伝統的に培われてきた畑地での栽培方法がスモモ栽培の実践とも深く関わっている可能性があることがわかった。



図2 スモモ園での野菜栽培

（※）アタリ…自家消費用の野菜を育てるための小規模な農地のことを指す。

以上を踏まえると、「花螺李」がもつ換金作物としての価値の高さもさることながら、「手間がかからない」という特性が大和村に定着した要因として大きいことが明らかになった。さらに、近代以降に導入された果樹栽培がローカルな作物栽培方法と密接に関わりながら実践されている可能性も明らかになった。

温暖な気候はスモモ栽培にとって好条件（大和村での現地調査より）

- ✓ 1月上旬にかけて気温が低下した後、1月下旬に気温が上昇していた（図3）。
- ✓ 1月下旬~2月上旬にかけて発芽し（図4）、その後2月上旬に開花し始めた。
- ✓ このときの低温遭遇時間は12℃を基準としたとき約500~550時間であった。

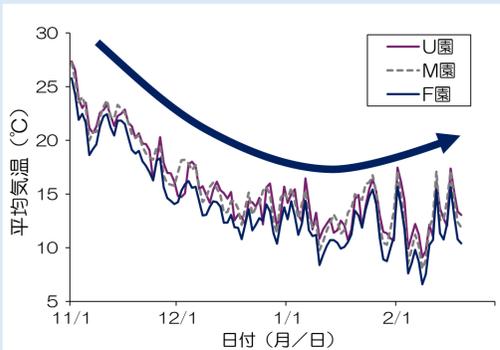


図3 各園地の平均気温（大和村）

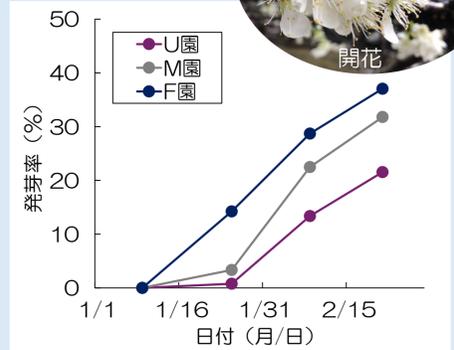


図4 各園地での発芽率

「花螺李」だから成功した理由（鹿児島市でのモデル実験より）

- ✓ 「花螺李」には、スモモをはじめとして落葉果樹全般にみられる休眠特性があるものの、その程度はほかの品種と比べて非常に浅いことが明らかとなった（図5）。
- ✓ 「花螺李」の低温要求量は12℃以下の低温を基準として約500時間、「サンタローザ」では約800時間と考えられた（図6）。
- ✓ 奄美大島では低温遭遇量が500時間程度を超えると気温が上昇し始めるため、「サンタローザ」のような品種は適応できない。

500時間を超えるころ（12月下旬）に「花螺李」は発芽し始めた！

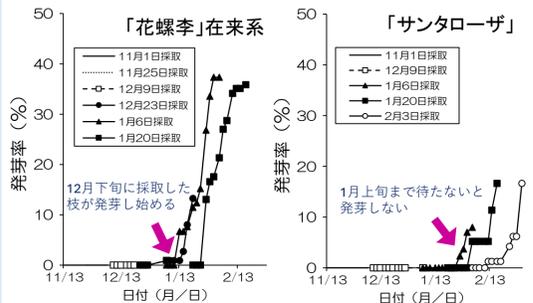


図5 切り枝を使った発芽試験（鹿児島市）

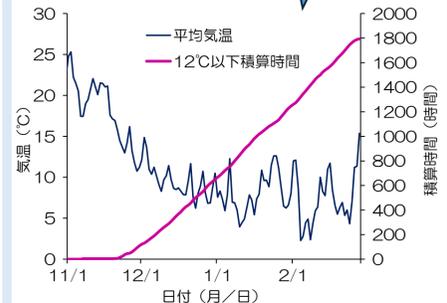


図6 圃場の平均気温と低温積算時間（鹿児島市）

以上より、奄美大島に特徴的な気候、つまり冬季が短く気温が上昇する時期が早いという気象条件が「花螺李」の生育特性によく合っていたと考えられた。

まとめ

今回のプロジェクトを通じて「花螺李」の生育様相と定着過程について一定の知見が得られた。特に「花螺李」は近代以降のグローバルなつながりが発端となって導入されており、さらに気象環境も「花螺李」にとって非常に好条件であった。現在では地域経済を支える存在へと発展してきたスモモは奄美群島の中でも特徴的な存在だといえる。